

対談

総長カレーとiPS細胞

京都大学総長 尾池和夫 + 心の未来研究センター長 吉川左紀子

心の未来研究センター設立に尽力された尾池総長に、センターに寄せる思いをお聞きし、センターのあり方を考えました。総長カレー発売で京都大学HPのアクセスが倍増した話など、興味深い話題が次々に展開されました。



吉川左紀子



尾池和夫

「こころは下にある？」

吉川 2003年から2007年までの5年間、京都文化会議という公開行事が京大で行われて、尾池先生は前総長の長尾真先生から引き継いでこの会議を主催してこられました。そのあたりのことから、お話を伺えるでしょうか。

尾池 これは「地球化時代のこころを求めて」というタイトルを持った会議で、私は4年間ですけれども、いろいろな人のお話を聞かせていただきました。この会議が終わったら何か答えが出るかなと思ったら、出てこない。それで永続的な研究機関をつくって、この精神を引き継がないといけないと考えました。そのアウトプットが「こころの未来研究センター」になったわけです。稲盛和夫さんに話すと賛同して下さって、研究センターができ、建物もでき、寄付もいただくことになりました。

私自身、毎年、文化会議の最後のまとめ話すために取材をしたり勉強したりしました。その中で1つ覚えているのは、小学生に「こころはどこにある？」と聞いたら、「下にある」と答えたのです。4年生か5年生になると難しい漢字が増えて、「思」「志」「意」などが出てくる。なかなか覚えられないでいると、お母さんや先生が「こころが下にある」と毎日のように言うんだそうです。それで「こころは下にある」と答えた。漢字はとても意味の豊かな文字で、4,000年以

上の歴史がありますから、なるほど文字を見るのは大事なことだと、その子どもの話で悟ったんです。

吉川 「地球化時代のこころを求めて」というタイトルはどなたの発案なのですか。

尾池 タイトルはみんなで議論して決めました。「こころ」をそのまま使うことになってよかったと思っています。私は「こころ」という言葉にこだわっていて、いろいろ調べました。フランス語の「mon cœur」（私のこころ）はシャンソンにありますし、『Cuore』（こころ）というイタリア語の本（エドモンド・デアミーチス著）が翻訳されて、カタカナで『クオレ』として出ていました。韓国では「心」という漢字を「シム」と読み、「心」や「心臓」を表すのですが、それとは別に、日本語の「こころ」「気持ち」に近い「マウム」という言葉があります。

「Kokoro」を国際語にしたいと思いますが、それとともに、いろいろな国の人が「こころ」をどういうふうに表示しているかという言葉の収集も、このセンターの1つの仕事にしてほしいと思っています。

「こころ」のコレクション

吉川 こころの未来研究センターができたすぐのころに、人文研の金文京先生が「『心の未来記』という文書が室町時代にあったようです」と教えてくださ

忌忍志忘忠念忽忿怒思怠急忽恁恋恐
 恕恙恚恣息恂悉悠悪窓悲惠惑惠悪惣
 惹葱想眷愁愆愈愍愚感慈愬愿態慝慙
 慧愆慰愆愆憊熹憇憲勲懇應瀟懲懸戀

下に「心」のつく漢字の例

ました。私はまだ調べていないのですが、予言の書らしいんです。

尾池 それはぜひ捜してください。世界中に「こころ」という言葉を使った本がたくさんあるはず。そのコレクションをつくったらいい。ちゃんと宣伝すれば、いろいろな人が寄贈してくれると思います。文献集とか論文も含めて、各国語の「こころ」の本をすべて集める。そして、研究に来る人はそれを参考図書として利用できるようにする。

吉川 それはいいですね。京都の六道珍皇寺というお寺に、鎌倉時代か室町時代の曼荼羅図があります。先日、センターの先生たちとお寺に行ってきたのですが、ちょうどその曼荼羅図が公開されていて、間近に見ることができました。真ん中に「心」という漢字を書いた「熊野観心十界曼荼羅図」というもので、誕生から死まで人間の一生が春夏秋冬の季節の移りかわりとともにとても詳細に描かれており、中世の「こころ観」を表す図像としてとても説得力がありました。

尾池 そんな画像も含めて、何十年かかってもいいから、世界中の、見える形になった「こころ」のコレクションをすればいいですね。

京都文化会議で話を聞いていると、さまざまのこころが出てくる。でも、全部人のこころです。しかし、日本人は物にもこころがあると考えてきました。草花のこころ、大地のこころ、星のこころ……。

ある雑誌の環境問題特集で、毛利衛さんが宇宙から見た地球の話を書いていました。もし人類が減びてしまっても、生き物が全部死に絶えても、地球はそのままあるに違いない。そのときのことまで考えた環境問題論も必要ではないかと彼は言います。地球社会の調和ある共存と言っているが、それに失敗して人間が死に絶えたあとも地球にこころが残っているのか、ぐらいつまでこのセンターで考えていただくと永続性が出てきます。

豊かなこころは全身で支える

吉川 「こころの探求」というと、人文科学的な研究をまず考えますが、先生は、理系的なアプローチでもこころの探求は可能だと思われませんか。

尾池 思います。私が一番最初に「こころってどこにある？」と聞いたのは利根川進さんなんです。彼は京大で私のクラスメイトだったのですが、即座に頭を指して「こころや」と言いました。彼は今、脳の研究をしていて、それは記憶の研究から始められていますが、最終的にはこころの研究をしたいようです。

こころは脳だけではなく^{はら}肚にもありそうだと、というのが、理系の究極の目指すところだと思います。いろいろな生物は頭が切られても体はピクピク動いていますし、そこにこころがあるかもしれない。胆が座っているとか、腹が黒いとか、もともと^{たんてん}丹田にこころがあって、それがだんだん上がって

きて、今は脳にあることになっている。

吉川 「丹田にこころがある」とこう言われると、何となくそうだなと納得できるのが（笑）不思議ですね。

尾池 私は、全身で脳を支えているんだと思うんです。それを理由にして、「うまいものを食べせろ」といつも言う（笑）。「衣食足りて礼節を知る」ですね。

だから、豊かなこころは全身で支える。しかし、おいしいものを食べて栄養を摂ればこころが豊かになるとか、妙なところで不満が出てきます。ストレスとかね。そういうものは、大脳をメディアにしてやり取りする中で出てくる。そのへんが今一番テーマになっていますが、例えば、どういうものを食べていればこころが豊かになるとか、本当に衣食が足りれば礼節を知るのかとか、そういうことも、このセンターの大きなテーマだと思います。

吉川 なるほど、物質的な豊かさとこころの豊かさにはどのような関係があるのか、と考えると、いろいろ



熊野観心十界曼荼羅図(六道珍皇寺蔵)

なことが見えてきそうです。

幸せの論理、しわ寄せの論理

吉川 ころの未来研究センターは、名称からいばまさに「地球化時代のころを求め」センターということになるわけですが、ころ、というのは捉えどころがないものですから、焦点の合わせ方がなかなかむずかしい。最近思いついたのは、人間のころを「外からの働きかけに応えるときに生来のパワーが発揮される何か」と見ると、少し捉えやすくなるかもしれない、ということです。個の自律性とか主体性といった見方とは真逆なんです。受け身の能動性、といったらいいのか……。ころの変化や成長が何によって引き出されるのか、ころが豊かになる環境というのは、自然環境であれ社会環境であれ、それはどんなものか、というような視点で考えていくと、ころというもののいろいろな側面が具体的に見えてくるような気がしています。

社会と人間との関係を考えるときにも、うまくその人のころを動かす何かと出会える場が提供されているかどうか、から考えることが大切で、それが若い人にとっては大学であったり、そこでのさまざまな人との出会いであったりする、といったことがいえると思います。

尾池 そういう場に入ることができた人はとても幸せですね。それで一生懸命やると、そのお返しが向こうからも来るし、自分も感謝してまたお返しをする。それは幸せの論理で、大学はそんなふうにできたらいいと思ってやっています。

しかし、そううまくいかない面もある。私はそれを、「幸せ」に対して「しわ寄せ」の論理と言っています。一生懸命やったら先生にぼろくそに言われたりして、恨みを持つ。すると「お返し」ではなくて「仕返し」

になる。卒業してから、あんな大学はぶっ潰せ、となっていくこともある。

どこで違ってくるのか。よくそれを本人のせいにする人がいて、人間ができていないからだ、恩を感じないほうが悪いという。だけど、必ずしもそうではないような気がします。私は、人間はふとしたきっかけでどっちへ行くかわからない存在だと思っています。

吉川 本当にそうですね。私の研究テーマの1つは、表情に表れる感情なのですが、特定の感情が生まれるきっかけは何か、なぜその感情が生まれるのか、というのは、非常にむずかしい問いです。あることを経験すると、全員が怒りを感じるとか、悲しみを感じるとか、そうした共通のころの動きがあるのではなくて、同じ嫌なことや、つらいことを経験しても、人によって、あるいは同じ人でも時と場合によって、怒りが喚起されたり、悲しみになったりします。その人がもともと持っている素質や経験の違い、知識量なども影響するでしょうが、何か、一瞬の出会いやタイミングのような偶然も、ころの中に生まれる感情を左右しているように思います。その仕組みの詳しいところはまだよく分かっていません。

尾池 一瞬のスイッチがあるのでしょうか。そのスイッチはかなり生理的なもので、例えば、食べ物の種類で変わるようなものではないかと思うんです。カルシウムが足りないとカッカするネズミがいる。人間もそういう面があって、栄養状態が悪いと、スイッチが悪いほうに入ることがありますね。

総長カレーとiPS細胞

吉川 さきほど尾池先生から、ころの未来研究センターでは草花のころや大地のころまで含めて考え



るように、と言われてちょっと困ったなと思ったのですが(笑)。それでというわけではありませんが「京都大学のころ」について、少しお話を伺いたと思います。

いま「京都大学のころ」を象徴するものは何か、と聞かれたら、私にとってそれは「総長カレー」なんですね(笑)。どうも不思議なのは、総長カレーはこれまでとは違う新しい京都大学の象徴のようでもあるし、京都大学100年の伝統の中から生まれた象徴のようにも思えるということなんです。きっかけは、尾池先生が大学生協食堂のカンフォーラで期間限定のカレーのメニューを出すことを提案されたことでしたよね。

尾池 学生から、自分たちはなかなか直接総長に会う機会がない。もう少し総長に親しみを感じる企画をしたい。例えば総長がコーディネートしたメニューで飯が食えるというのはどうか、と言われたのが始まりだったんです。

吉川 そのカレーは私も食べましたが、おいしいと評判になって期間を延長し、カンフォーラの定番メニューになり、さらにレトルトにもなって、今では京大名物の1つになりました。それは、iPS細胞で京大の名前が世界的に知られるのと性質は違いますが、本当に京大らしいなと思いました。

尾池 最初に学生が求めてきたということに大きな意味があります。大学では学生が求めることがきっかけでないと物事はうまくいかないんです。いくらこちらから仕掛けてもだめなので、私は「放し飼いかし」と言っていますが、病気をしないようにきれいな場所をつくって、自由奔放に走り回るニワトリを育てる。だけど、元気がいいからいろんなことを言ってくる。それをすぐに受け止める。総長はそういう役目だと思います。

iPSとカレーの違いですが、私が京都大学を紹介するときによく使うのは、イノベーション・アンド・トラディション(innovation and tradition)という言葉です。イノベーションは先生たちがやる。これがiPS細胞研究センター(京都大学物質-細胞統合システム拠点iPS細胞研究センター)の話で、京大は放っておいても優秀な人が集まってくるから、それも放し飼いにする。そうすると、勝手に世界を目指して活躍するわけです。山中伸弥さんも神戸大学を卒業して奈良先端科学技術大学院大学遺伝子教育研究センターに行っていて、京大へ来た。すると、そこへまたいい学生が集まってくるのです。

一方、カレーはトラディションのほうです。ニワトリが病気になるような場所を守っているのが自由の学府というトラディションです。学生が求めてきたとき、何が一番京大の風土に合うか考える。何層もあるハンバーガーを売り出すと話題にはなるかもしれないけれど、京大という学府に合わないから、総すかんで食らいます。

尾池 大学とまったく関係がないものを作って売っても金儲けだと世間の人は見ますから、総長カレーにしてもビールにしても、ちゃんと説明できるようにしています。

日本人でカレーライス初めて食べた人って誰だか知っていますか。カレーライスの物語にはたいてい出てきますが、京大の第6代総長山川健次郎なんです。アメリカへ留学する船の中で、何かご飯が食べたいが、お米のメニューはカレーライスしかないというので、カレーライスを食べたはずだったと回想録に書いてある。でも、誰もそんなことは知らないでしょう。

吉川 はい、知りませんでした。

尾池 うちの元総長が日本人で初めてカレーライスを食べたんだから、京大の名物としてカレーのレトルトパックぐらい売ってもいいでしょう。

発売元のKB S京都は、売り出すときに私の写真を入れたと言ってきたんです。絶対にだめだと言いました。総長が誰に代わっても総長カレーは第6代総長山川健次郎のカレーで、私のカレーじゃない。これだけ説明したら、だいたい人は京大でカレーを売っている理由に納得してくれます。

学生の意見を聞きながらやらないといけないと思うから、カレーもお米をいくつかとルーをいくつか組み合わせて15種類ぐらい考えて、これでフェア

カレー発売でアクセス倍増

をやったと提案しました。そうすると人気投票ができる。必要ならその上位のものを残せばいいという意識があったので、アンケート方式を仕掛けたのです。また、当時のカンフォーラの中島店長が料理の腕がいいことを知っていました。あの人は15種類をやれるということで頼んだところ、採算度外視で徹夜しながら試作してくれたんです。

私は、総長はトラディションと広報の係だと思っています。京都大学の名前を売り込むことが私の使命なのです。研究は勝手にやってくれるけれども、カレーは私がやらないと誰もやらない。ヤフーがインターネットでカレー発売のニュースを出してくれると、京都大学のホームページのアクセスがばっと増えたんです。日ごろは2.5万ビジットですが、そのニュースのときはほぼ2倍になった。京大なんかまったく見たこともなかった人が5万人見に来たのです。広報機能としてはすごい量でしょう。

京大生協でのレジ袋削減というニュースがヤフーで出たら、アクセスが何万人か増えました。その次の日がIPS細胞研究センターの設置でした。すると、それに匹敵するぐらいアクセス量が増えました。レジ袋削減の効果はすごい。3カ月後には、学生がレジ袋をほしいという率が1割を切りましたから。

現場を見る、いつも意識調査をする、広報が大事、それをセットにして私は毎日仕事をしています。その結果がときどき成功する。カレーは成功例でしょうね。

尾池 私は専門の地震のことで自分のサイトにエッセイを載せていますが、総長になる前に、自分がエッセイで書いたとおり鳥取で地震が起きました(2000年10月6日の鳥取県西部地震)。フジテレビが、こんなエッセイがあるといって放送した途端、ホームページのアクセスが何百と走ったんです。こんな世の中になったんだと思ったものです。そこで、総長になったとき、いろんなことはできないけれども、京都大学のホームページのアクセス量を増やそうと思いました。

今は若い人はみんなヤフーを見ている。だから、ヤフーがトップに上げるようなニュースを出すことを心がけてきました。カレー、ビール、エビフライ、エコバッグ、レジ袋、一生懸命やると、ちゃんと世の中は受け止めてくれることがわかりました。

こころの未来研究センターも、私は名称



「総長カレー」のレトルトパック

から「未来」を取るなということと、「こころ」を平仮名にすることだけはしつこく言いました。

吉川 「こころの未来研究センター」という名称は、設立準備の委員会などでは「何、それ?」という感じであり褒めてもらえませんでした。大学以外の人たちの評判はともいいですね。

尾池 看板ですから、外の人注目してくれることが重要ですね。

吉川 こころの未来研究センターは、ひとつひとつの研究に対してじっくりと時間をかけて取り組む場となることが大事だと私は思っています。それから、若い人がこういうセンターができてよかったと思うセンターにすること。そして、ときどき、総長カレーのように、みんなが「えっ」と注目するような何かを……。

尾池 それはあんまり考えないで(笑)。最初の話ではないけれども、考え過ぎて答えが返ってこないとお返しではなく、仕返しになりかねない。自然体でいていただけたらいいと思います。

吉川 それをうかがって、安心しました(笑)。研究センター、というとピラミッドのように、成果をひとつひとつ積み上げていって何かをつくりあげる場所というイメージがありますけれども、こころの未来研究センターは、ピラミッドモデルではなく、里山モデルを採用したい(笑)。さまざまな専門領域のこころの研究者が集う里山というイメージで考えてゆくと、いいセンターになるのではないかと考えています。

尾池 そのとおりでしょうね。

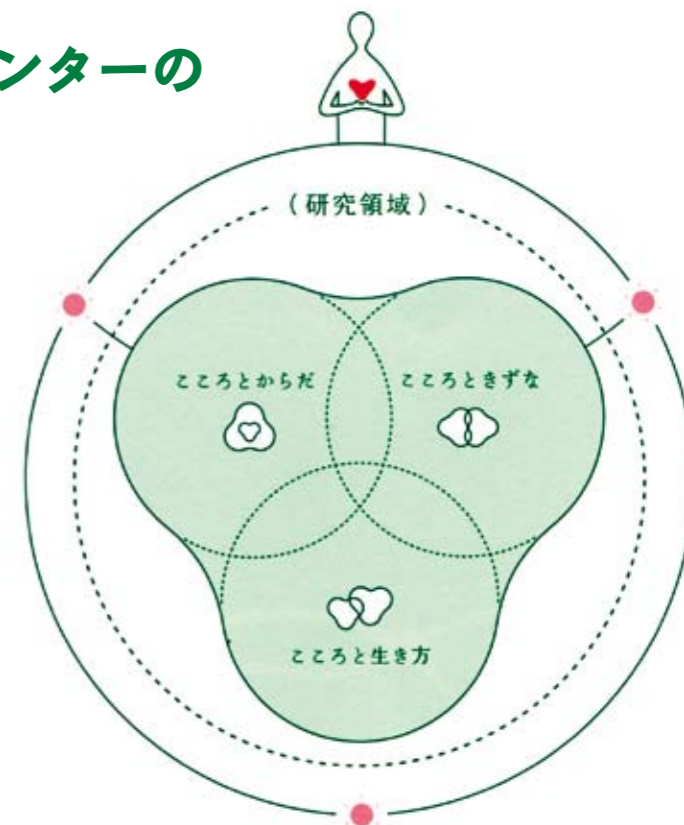
吉川 今日は貴重なお話をありがとうございました。

尾池 ご苦労様ですが、よろしくお願ひします。

(2008年6月23日、京都大学にて)

こころの未来研究センターの 設立経緯と概要

こころの未来研究センター長
吉川左紀子



京都大学こころの未来研究センターは、こころについての学際的な研究センターとして2007年4月1日に設立された。本センターは、「こころ」という目に見えない対象を正面に据えて、そのはたらきの解明をめざして多彩な研究プロジェクトを推進するユニークな研究組織であり、さらに、その成果に基づいて、未来に向かって生きるこころのあり方のヴィジョンを提示することを長期的なミッションとして掲げている。

研究スタッフは、現在、専任教授5名と助教4名、事務スタッフは事務長(兼任)、専門職員、および非常勤職員3名。京都大学では一番小さな研究センターだが、学内外の連携研究員の方々の協力を得て、現在20もの研究プロジェクトが立ち上げられ、それぞれ順調に進行している。

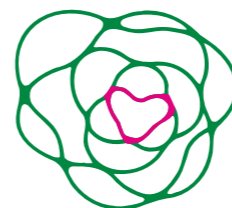
こころの未来研究センターの設置には、21世紀COEの「心の働きの総合的教育研究拠点」、および京都大学が京都府、京都市、稲盛財団などとともに開催した「京都文化会議：地球化時代のこころを求めて」とい

う2つの先駆的事業が深く関わっている。本センターは、この2つの事業の成果を発展させる形で、「こころ」を探求するための研究組織として設置された。「こころの未来」という名称が認められるまでには、大変長い議論があったのだが、尾池和夫総長から強い後押しをいただき、「こころに生まれる未来の時間、こころが生きる未来の社会」という2つの時のイメージを織り込んだ「こころの未来研究センター」は、無事スタートした。センターの英語名称は、Kokoro Research Centerである。Kokoroが国際語として認められるよう、本センターから、その名にふさわしい研究成果を国内外に向け発信していきたいと考えている。

センターには「こころとからだ」「こころときずな」「こころと生き方」の3つの研究領域がある。センターで実施されるプロジェクトはいずれも、これらの領域、あるいは複数の領域にまたがる形で設定されている。からだ、きずな、生き方という3つのキーワードを決めるまでにはかなり時間をかけて話し合い、最終的には、「この3つが重要だ」という

私たちの信念、直感にもとづいて決定した。人文、社会、自然科学のいずれのアプローチでもかまわない、この3つの領域とその融合領域の研究をバランスよく進めてゆくことで、「こころ」というものの本質に少しでも近づくことができるのではないかと考えている。

これまでに、センターでは神経科学、認知科学から民俗学、宗教や芸術まで含む、幅広い専門領域の講師を招いてすでに27回にのぼる公開セミナーを開催してきた。2008年度からは京都府との連携事業で公開シンポジウム「こころの広場」も開始している。こうした企画は、週日の午後から夕方という時間帯に実施されることが多いにもかかわらず、学生や教職員だけでなく一般市民の方々も数多く参加されており、センターへの問い合わせも多い。本センターで実施されるこころ研究への強い期待を感じるとともに、今後、新しい研究の場である稲盛財団記念館で進められる多彩な研究プロジェクトの成果が、本誌やインターネットを通じて広く社会に発信されることを願っている。



**KOKORO
RESEARCH
CENTER**
KYOTO UNIVERSITY